



# いれずみ物語

— 8 —

小野 友道

## 背中のいれずみ —五社英雄の決意—

四つ足歩行の哺乳類の、その身体の中で最も目立つのは、顔は別として、背中ではないだろうか。虎やヒョウの文様も背中が美しい。自分より大きな相手にとって背中は目立つので、山荒らしの威嚇の棘は背中一杯にある。猪などの子のうり坊は、目立ちすぎる背中の保護色効果を狙った神の贈り物である。犬や三毛猫などの配色は背中にあるが、おなかは地面に向かって目立たず、ほとんど毛が少なく白い。それが一転、2本足歩行を選んだヒトでは、おなかの方が正面となり目立つようになった。背中は控えめに後ろに回ってしまった。もちろん毛もほとんど無くなった。背に腹は代えられないというが、動物とヒトでは反対である。

しかし、ヒトにその痕跡は残っていないでもない。一つは蒙古斑である。蒙古斑は通常お尻にあるが、範囲が広い赤ちゃんでは、背中一杯に青い斑が広がる。このような場合でも、お腹にはまず認められない。また、背中から腰にかけて、まるで水着を着たような分布を示す巨大色素性母斑という痣がある。黒いごわごわした皮膚に黒い毛が密生する。それはあたかも動物の毛皮を髣髴とさせるので、以前は医学用

語としても「獣皮様母斑」と呼ばれていた。現在はもうこの偏見に満ちた診断名は使用されないが、この場合も、まずお腹のほうまでは広がりを示さない。つまり、我々ヒトの色素の分布も、とくにそれが異常を示す場合に顕著であるが、背部に優勢的に見られる傾向が強い。

本来、背中は目立たねばならない部位であったのだ。ヒトも動物も自分自身の背中を簡単に見ることができないのは同じであるが、後ろに回ってしまったヒトの背中は、さらに他人から目立たない位置へ追いやられてしまった。

\*

「せなか」に当てられた漢字からも背中はいろめたい。「背」は背水や背信など、あるいは歌を忘れたカナリヤが捨てられそうになった背戸など、そのイメージははなはだよくない。英語でも“back”の意として、less important side or surfaceとあり、It was the back of my mind. (忘れていた)あるいはHe was on his back for three month (入院していた)などある。ヒトの背中は寂しい日陰の場所となったのである。それでヒトは背中に不安を感じるセンサーを持った。太宰は「背中に毛虫が十匹

這っているような窒息せんばかりの悪寒」(『畜犬録』)と表現をしている。

また、エドワード・リア (Edward Lear) は“A BOOK OF NONSENSE”で、

There was an Old Person in black.  
おっさん黒着て格式張った

A Grasshopper jumped on his back;  
背中にぴよんと大きなバッタ

When it chirped in his ear,  
じんじん力み

He was smitten with fear,  
こよなく不気味

That helpless Old Person in black.  
黒のおっさんしゃちほこばった

日本語訳は柳瀬尚紀で、英語以上に韻を踏んでものすごい訳である。かように、背中はいつも気になるが、自分で見えず他人からしか見えない不安な場所である。

\*

そんな背中になぜいれずみをするのか。いや、そんな背中だからこそ、いれずみをするのだと言ってよいのではないか。ちなみに、『後漢書』の<西南夷伝>などに見られる哀牢夷の伝説は、「沙壺という女性が、牢山に住んでいた。水中で魚を取って沈木に触れ、そのために妊娠した。十ヶ月にして十人の男子を生んだ。ところがその沈木は化して竜となり、人語を語り、わが子はどこにあるかと問うた。九人の子はびっくりして逃げてしまったが、末っ子一人だけが去ることができなくて、竜に背を向けて坐ったところ、竜がその背中をなめたというのです。「背」を梵語で「九」といい、「坐」を「隆」というので、その一族を九隆と名づけた」(『倭と倭人の世界』)とある。その種族はみな竜文を彫ったという竜蛇信仰の物語である。背中に竜のいれずみ、もともと深い関係がありそうだ。

ベルツはいれずみを裸で仕事をする男の着物であるとした。また、いれずみが芸術であるとすれば、背中は最も広いキャンパスである。い

れずみ師の欲望を掻き立てずにはすまない。ところで、背中とはどこを指すのか。この場合、肩からお尻を含んだ背面としておこう。その背中はなにせ身体の表面積の18%を占めるのである。しかし、いれずみを背中に入れるのはその広さ故だけではない。不安な後ろに、油断なく気を配らねばならない、その後ろに、ヒトは動物の毛皮や棘に変わる防御、威嚇の装置を必要としたのではないか。黙って背中でものが言えないうちは、いれずみが必要なのである。高倉 健の歌う「唐獅子牡丹」の歌詞は、背中(せな)で吠えて、背中で泣いて、そして背中で呼んでる悩み深い男の背中のいれずみである。

かつて東大の駒場祭のポスターが話題になったのをご存じだろう。「とめてくれるなオッカサン背中の銀杏が泣いている 男東大どこへ行く」というやつだ。晒の腹巻姿の若者の背中などにぼかしのいれずみ、そして東大のシンボル銀杏を背負っている。悩む東大のシンボルであった。和久峻三の小説『背中から撃たれるな』に、弁護士は「敵に対して必死に戦いを仕掛けているうちに、見方である依頼者から背中を射たれたら眼もあてられない。敵にばかり眼を奪われているから、背後に隙ができる」「背中から弾丸を撃ちこまれたくなければ、依頼者への警戒心も解いてはならないのだ」と。

背中に気が漂って、静かに背中でものが言えると一人前の男である。大親分の、その背中を見て、黙って弟子や子分が育つのである。不安を乗り切った大親分が、何ゆえ背中のいれずみを曝す必要があるだろうか。

一方、「旅立ってゆくのはいつも男にて カッコよすぎる背中見ている」と俵 万智が詠む背中もある。背の君である。背中で好きだよと言って振り向かない。また、背中に彫り物の男に抱かれることで性的興奮が増す話を、斉藤卓志が紹介している。「<ホテルのベッドの上の大きな鏡に写った男の背中を見て、それだけで…>というのだ。もちろん背に刺青が在ったことはいままでない」





故五社英雄監督 五社 巴著『さよならだけが人生さ 五社英雄という生き方』より転載

ともかく、背中のいれずみは、大切な男自身の後ろ盾である。そうでなければ映画監督五社英雄は、50を過ぎて背中一杯にいれずみはしなかった。蒸発した妻が残した2億円の借金を懸命に返している途中に、再婚もした。娘が瀕死の交通事故を負った。そして、さらに五社は短銃不法所持で逮捕された。それでフジテレビも追われた。

私が皮膚科医になりたての昭和43、4年ころ、先輩の実験手伝いをした。酒を飲み、モノクロテレビで「三匹の侍」を見ながら、電子顕微鏡の試料作成に都合の良い、温度と湿度が下がる深夜を待つ。その「三匹の侍」のディレクターが五社であることは誰もが知っていた。フジを追われた五社が、飲み屋でもやろうと思っていた矢先、東映から救いの手が入り、例の「なめたらいかんぜよ」で有名になった夏目雅子の『鬼龍院花子の生涯』の映画監督を務めるのである。その後の『陽暉楼』の撮影の合間に五社は彫り物に通った。映画のヒットによって父が完全に立ち直ったと娘は信じたが、五社は50を過ぎて漠然とした不安を抱き、身近な人に「死」について話していた。そのような時期の昭和58年の新年、五社は彫り物を決意したという。

「父が死の話ばかりするのを見かねた友人に、<監督がそんなに死に捕らわれているの

なら、死ぬ覚悟で彫り物をしたらどうか>と勧められた」「父の場合は、悩みを解決する手段が彫り物であった」と娘の巴が述懐している。まさに不安一杯で自信のない初老男の後ろ盾としての決意のいれずみである。「日本一の彫り師と呼ばれる二代目・彫芳に彫ってもらった」と娘に自慢したその彫り物は、「背中一面と両側の二の腕に彫られ、背中一面には、鎧兜を身につけ太刀を振るう武者の背中に、目をむき口が裂けた鬼が今にも襲いかからんとする壮烈な凶柄」であった。完成までの1年半、痛みに耐え、それを代償に家庭の破壊、死の恐怖から逃げ出していたのであろう。「父の彫り物には、死ぬまで消えなかった父の苦悩や悔しさといったさまざまな思いが一彫り一彫りの針先に込められている」と考えた娘であったが、彫り物の写真撮影を希望した父の願いを突っぱねた。背中の彫り物は五社とともに灰に帰した。享年63歳であった。

(熊本大学 理事・副学長)

#### 主要文献

- 1) 飯沢 匡：『東大と刺青』、『飯沢匡刺青小説集』、立風書房、1972。
- 2) エドワード・リア（柳瀬尚紀訳）：『完訳ナンセンスの絵本』、岩波書店、2003。
- 3) 国分直一編：『倭と倭人の世界』、毎日新聞社、1975。
- 4) 五社 巴：『さよならだけが人生さ 五社英雄という生き方』、講談社、1995。
- 5) 斉藤卓志：『刺青 Tattoo』、岩田書店、1987。
- 6) 俵 万智：『サラダ記念日』、河出書房新社、1987。
- 7) 和久俊三：『背中から撃たれるな』、角川文庫、1982。